

Kṛiyasāngrahaṇapāṇjikaに見られる シヴァ教文献とのパラレルについて

研究員 種村 隆元

インド密教に関する研究はここ二十年ほどで劇的に進展してきている。それとともに、密教といわゆるヒンドゥー教のタントリズム、就中、シヴァ教との類似が明らかになってきている。本研究発表は密教とシヴァ教の類似に関する一事例の報告である。

本研究発表が題材とした *Kṛiyasāngrahaṇapāṇjika* 『所作集註』は、寺院建築の流れに沿って密教の儀礼、特に公共の場において行われる諸儀礼の規定を説くマニユアル集で、シヴァ教の「プラティシユタータントラ」と呼ばれる聖典群、「パッダテイ」と呼ばれる儀礼マニユアルに相当するものである。『所作集註』とプラティシユタータントラ、パッダテイの間には幾つかの類似点が見られる。

第一に聖典の階層構造に類似が見られる。『所作集註』はその儀礼体系を『真実撰取経（初会金剛頂経）』に説かれる金剛界マンダラに依拠している。『真実撰経』は「ヨーガタントラ」と呼ばれる経典群の主要経典と見なされているが、このヨーガタントラは後代のタントラにより、基礎的ではあるが低位のクラスと見なされるようになる。一方、プラティシユタータントラやパッダテイの儀礼体系はシヴァ教の「シッダーンタ」と呼ばれる聖典群のそれに

依拠している。このシッダーンタは非シッダーンタにより基礎的ではあるが低位のクラスと見なされるようになる。密教、シヴァ教の双方において、公共の場での儀礼は、基礎的ではあるが低位の聖典の説く儀礼体系に依拠しているのである。

第二に、双方ともその主要な儀礼後援者は王権であり、『所作集註』にも王権を後援者と想定する記述が幾つか見られる。

第三に、『所作集註』とプラティシユタータントラ、パッダテイの類似は具体的なテキストにも及ぶ。『所作集註』の「前兆の説示」と呼ばれるセクシヨンのテキストのかんりの部分が、シヴァ教のプラティシユタータントラの一つである『デーヴィヤーマタ』の「異物の除去」章のテキストと平行関係にある。

今後のインド密教とシヴァ教の具体的な関係の考察には、このような証拠を少しずつ積み上げていくことが必要とされている。